

# 大分県方言の文末詞とイントネーション

## — 玖珠地方の疑問の「へ（ー）」の実態報告 —

国際言語・文化学科

准教授 松田 美香

### ① はじめに

#### 1-1. 文末詞とは

「文末詞」という語は、まだ一般的ではない。しかし、大分県(1991)<sup>1</sup>には「第五節 文末詞」が立てられている。以下に節の冒頭部分の一部を引用する。

○キョフーワ アチフー ナフー。」

きょうは暑いねえ

○ワカフッタ カ」。わかったか

の、「ナー」「カ」のように、文末にあつて、その訴えかけの機能をになうのが文末詞である<sup>2</sup>。

この用語は「終助詞」を含む意味を持ち、各終助詞にあたる語が複合したり更に融合形を生み出したりしている各地方言の研究の場合、「終助詞」と呼ぶより現実にあう。日本語全体を見る場合には、必須の概念であろうと思われる。

#### 1-2. 疑問の文末詞と文末イントネーション

その文末詞の有無がものごとを聞き手に尋ねる文になったりならなかったりすることを決定するのであれば、それは「疑問の文末詞」であるといえることができる。

大分県直入町長湯の例 ( )内は共通語訳

例1 ゴメン。オリマスナ。

(ごめん。いますか?)

例2 オリマス。(います。)

この方言では、「オリマス」が「います」という意味であり、「ナ」を付けることによってはじめて「いますか?」の意味になるのである。した

がって、「ナ」は「ものごとを聞き手に尋ねる」意味、疑問の文末詞であるといえることができるだろう。

さて、共通語では、疑問の文末詞は存在せず、上昇イントネーションがその役を担っている。

例3 雨が降っている。

例4 雨が降っている」(?)

共通語においては、文末の上昇イントネーションが「雨が降っているかどうか」を尋ねる意味を担っている。例4の(?)は疑問符であり、その前の記号「」によってイントネーション(音調)の上昇が示されているが、「?」で上昇イントネーションを表す場合も多い。

一方、上昇イントネーションのない例3では、聞き手は尋ねられている(疑問文)とは理解せず、話し手が「雨が降っている」ことを描写していると理解する。また、共通語には「か」という助詞があり疑問文中によく観察されるが、実際に疑問文にしているのは「か」ではない。

例5 雨が降っているか。(フ)

例5は、雨が降っているのを眺めながらつぶやいているといった情景が浮かぶ。つまり、疑問の意味が生じていないのである。以上のことから、文末のイントネーションにも留意して疑問の文末詞を取り扱う必要がある。

#### 1-3. 大分県方言における疑問の文末詞

(先行研究)

大分県(1991)『大分県史 方言篇』、「第四章 文法 第四節 文末部」に「玖珠郡下に問いの『へ』がある」とある。他に「第五章 文法各論

<sup>1</sup> 大分県総務部編(1991)『大分県史 方言篇』(315p.) 執筆者は小野米一氏。

<sup>2</sup> 藤原与一(1998)『日本語文末詞の歴史的研究』。(2004)『日本語における文末詞の存立』ともに三弥井書店を参照。

第五節 文末詞を見ると、問いの文末詞として「ナ」(県南部)、「ニャ」・「デツヤ」(保戸島)、「カヤフー」(県南部)、「エフー」(県北部)、「カエ(ー)」(県北部)、「カ」(県北部・県南部)、「ノカ」(県中部)、「カイ」(県北部・県南部)、「ケー」(県北部)、「ノ」(姫島)、「ン」(県北部)、「ノン」(県北部)、「デー」(県北部)などが載っている。

中津市を中心に使われている「デー」という文末詞について、松田正義・日高貢一郎(1996)<sup>3</sup>の中津北部方言では、次のように解説されている。

この「デ」は県北の方言ですが、これには「ですか」と「ですよ」の二つの意味があります。

たとえば、「あれは学校デ」というと、「学校ですか」の意、「そりゃわしの傘デ」というと「わたしの傘ですよ」の意味になります。北部では「ですか」と「ですよ」を使い分けますが、その他の地域では「ですよ」だけを使います。(294p.)

…たとえば、疑問の時は「デ」を軽く短く発音します。

これに対して断定の場合は「で(ママ)」を長く強く発音して(330p.)

中津市北部の「デ」も興味深いのが、詳細は別稿で述べることにする。

さて、大分県方言の疑問の文末詞を概観してみると、疑問の「カ」やそれに類する形だけでなく、多彩な語形が各地に分布していることがわかる。

今回は、玖珠地方で使われている疑問の文末詞「へ」を取り上げ、その特徴や成り立ちを探りたいと思う。上述の松田・日高(1996)の玖珠郡九重町飯田(くすぐん・ここのえまち・はんだ)には、次のように解説されている。

オリマスカをオルへー、ソーデスカをソーへーというように、疑問の「か」に当たることばです。オルカよりオルへーの方が丁寧になります。

以前、長崎に調査に行ったときに「へ」ことばに出会いました。長崎市では「アンタ ドコ行くトへ」「ソレウチンクレンへ」というぐあいに盛んに使っていました。この町だけかと聞くと、「ドコデン イッパイ使ットリマスバイ」ということでした。(242-243p.)

この解説を読む限り、疑問の文末詞「へ」は大

分方言独自のものではないようだ。語源については、明確な記述がない。大分県方言と長崎県方言の「へ」が同一のものかどうかはこれから調べなければならないが、大分県方言の「へ」について明らかになれば、長崎県方言に資することもあると思われる。

## ② 玖珠地方の文末詞「へ」

### 2-1. 平成23年5月調査

筆者は「大分方言50年の変容研究会」<sup>4</sup>に属し、平成21~23年の大分県内13ヶ所の臨地調査に参加した。昭和30年に最初の大分県全域の方言調査が行われてから約30年後に少し地点数を減らして追跡調査が行われ、「30年の変容」として報告された。本調査はさらに年月が流れておよそ50年が経つことから、50年後の大分方言を調べるために発足したものである。

玖珠郡の調査地は第1次調査・第2次調査地でもあった当初と同じ九重町飯田で、平成23年5月に行った。調査の形式は男女ペアで、高年層・青年層・中学生の3グループに分かれ、「朝」「夜」「道で」などの場面設定だけを与えて即興で交した会話を1分程度録音したものである。被調査者には、その土地で生まれ育った方を世話人を通じてお願いしておき、飯田地区の公民館にて、順次録音・撮影を行った。

### 2-2. 調査結果(スクリプト)

現在は調査結果の整備中であり、完全な結果は出ていないが、録音を文字起こししたスクリプト状態のものが手元にあるので、そこから文末詞の「へ(ー)」と見られるものを取り出してみた。

「朝」の会話 81歳男性×75歳女性

01男「オキチヨルへー。」起きているかな?<sup>5</sup>

02女「ハー。オキチヨルバイ。」はい。起きてるよ。

<sup>3</sup> 松田正義・日高貢一郎(1996)『大分方言30年の変容』明治書院

<sup>4</sup> 代表 福岡教育大学・杉村孝夫

<sup>5</sup> 「」の右は共通語訳。土地の方に確認しながら作成した。

03男「アンタモ ハヨー オクルホーへー。」  
あなたも早く起きるほうかな？

04女「インゲー。アタシワ モー アサ ネル  
ホーデ、モー アンタ オキレンホーバ  
イ。」いいえ。私はもう朝、寝るようで、  
もうあなた、起きられないほうですよ。  
(中略)

05女「アーユーチョッタケド、ヤッパ ○○サ  
ン キタへ。」ああ言っていたけれど、や  
はり○○さん、来たの？

06男「エー」ええ。  
(中略)

07女「(筍が) シゴホングライ アルカモシレ  
ンキー (08男 アー) ドーゾ (09男 アー  
ソーへ) ジブンデ ホッチョクレ。」  
(筍が) 4, 5本ぐらいあるかもしれないか  
ら (男 ああ) どうぞ。(男 ああそう  
か。) 自分で掘っておくれ。

「夜」の会話 81歳男性×75歳女性

10女「マー アレカー ジップングライ タッ  
チョルカタナー。」まあ、あれから10分ぐ  
らい経っているかなあ。

11男「アー ソーへー。」ああ、そうか。

「道で」の会話 81歳男性×75歳女性

12女「ア、ソコ キヨルンワ ○○サンジャ  
ネーへ。」あ、そこ(から)来ているのは、  
○○さんじゃないか？

13男「エー。ソージャ。(中略) アンター マ  
ター メカシコンデ ドコニ イキヨル  
へ。」ええ。そうだ。(中略) あんたは、ま  
た、めかし込んで どこに 行っているの？

「買い物」の会話 81歳男性×75歳女性

14女「オゴメーン。○○サン (15男 へーイ)  
オルへー。」ごめんください。○○さん  
(男 へーい) いるかな？

16男「オルバイ。」いるよ。  
(中略)

17男「ホーレンソーガ ワリアイ ヨーデキ

チョン。ホデカラニ アンタ アノー、  
ドライブインヤラニ ダシヨルケンタ  
ナー。(18女 アー ソーへ) アンタガタ  
イルへ。(19女 へー) ドンクライ  
イルへ。(20女 へー)」

ほうれん草がわりあいよくできている。そ  
れだからあなた、あのう、ドライブインな  
どに出しているからねえ。(女 ああ、そ  
うか) あんた方(は) 要るか？(女 はい)  
どのくらい 要るか？(女 はい)

(中略)

21女「ヤッパリ アノー モトガ カカッチョ  
ンジャンネーへ。ヤッパ オカネオ トッテ  
モラント コマルケド (22男 ンー)。  
ゴヒャクエンガナ クダサイ。」

やっぱりあのー、もとが掛かっているん  
じゃないか？やっぱりお金をとってもらわ  
ないと困るけど(男 うーん)。500円分く  
ださい。

23男「へー ソーへ。ンナラー、モー、ソー  
ジャッター、ヒトフクロナ、マケチカラ  
ニ、ロクフクロ アンタガタニ アゲ  
ヨー。」へえ、そうか。それなら、もう、  
そうだったねえ、1袋は(代金を)負けて、  
6袋あなたにあげよう。

## 2-3. 考察

### 2-3-1. 共通語との比較

#### ①共通語の「か」との比較

01, 03, 07, 11, 12, 17, 21, 23は、すべて共  
通語の「か」に置き換えることができる。共通語  
訳時は「かな」や「かい」などにするこ  
とで、より文脈に馴染ませることができ  
るため、例文の共通語訳は適宜そのよ  
うにした。さて、共通語の「か」は「不  
定の終助詞」と言われ、「疑問」の意  
味を必ずしも持たない。1-2. で述べた  
とおり、共通語の疑問文(問いかける文)  
を作るのは文末の上昇イントネーション  
である。

また、05や13は「来たの?」「行っ  
ているの?」としたほうが自然であり、「  
来たか?」「行っているか?」は現代日  
本語会話としては、かなり不自然な形  
である。文末の「の?」についても比較

必要である（後述）。

そして、09, 11, 18, 23は「ソーへ（ー）。」という形であり、「そう（です）か。」に当たる。問いかける文ではなく、相手の言うことへの納得や確認を表している。あいづちのように各所に差し挟まれ、相手の発話を促す役割もしているようだ。

### ②共通語の（文末の）「の」

上述の05や13は文末を「の？」としたほうがよいと判断したが、共通語の「の」も文末イントネーションと深い関係があり、上昇でなければ疑問文にならない。「行くの↑」は行くかどうかを問いかける文になるが、「行くの↓」とすると相手が行くことを納得したか、自分自身で確認している意味しか出てこない。ただ、待遇的に「か↑」よりも丁寧でやさしい表現になる点が異なる。①で述べた不自然さも、話し手が女性であることや話題が柔らかい等の理由から、「か」より「の」のほうが馴染むと考えられる。「へ（ー）」には、共通語「か」の持つ硬さやぞんざいさがないか薄いことが予測される。

また、問いかける文ではない場合、「そうなの」とあてれば問題ない。

### 2-3-2. 文末イントネーション

文末イントネーションを観察するために「SUGI Speech Analyzer V2.1」という音声分析ソフトを使って出した「ピッチ曲線」を示す。ピッチとは音の高低のことであり、日本語の高低アクセントとイントネーションの両方がピッチで表される。録音音声はおおむね明瞭だが、言い重なりがあると、両方の音声に反応し、聞きたい一方だけを切り離すことができないのが欠点である。今回も、上記した会話の中に言い重なりがいくつかあり、すべてを分析することはできなかった。

以下に、「へ（ー）」のピッチ曲線を示す。縦軸は音の高さ、横軸は時間である。

図1 05「(〇〇サン) キタへ。」のピッチ曲線

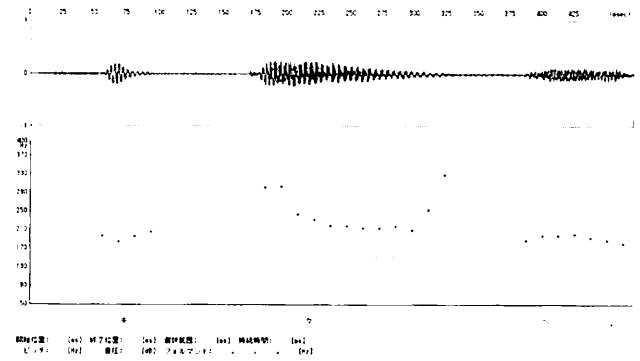


図2 12「(〇〇サン) ジャネーへ。」のピッチ曲線

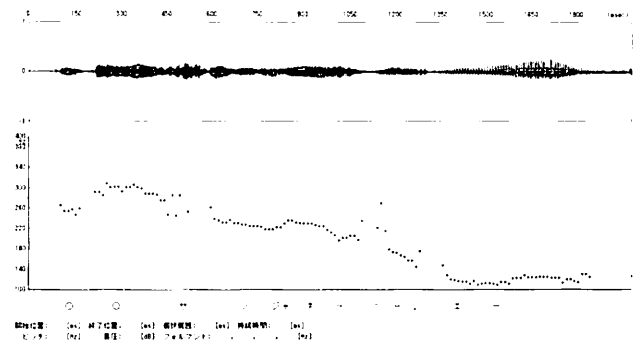


図3 17「イルへ。ドンクラ (イ)」のピッチ曲線

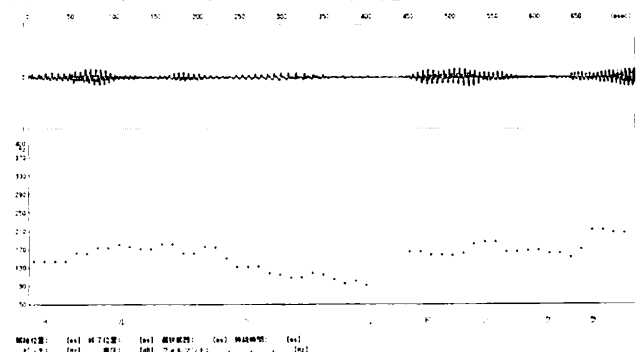


図4 14「オルへー。」のピッチ曲線

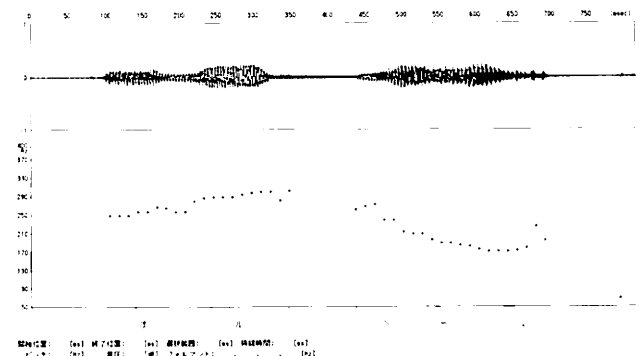


図1～3を見ると、文末に上昇イントネーションがないことがわかる。図1は特に下降している

とは言えないが、上昇もしていない。図4の最後の  
の上昇は、おそらく雑音を拾ったものと思われ、  
実際に聞いてみると上昇していない。

図5 01「オキョルへー。」のピッチ曲線

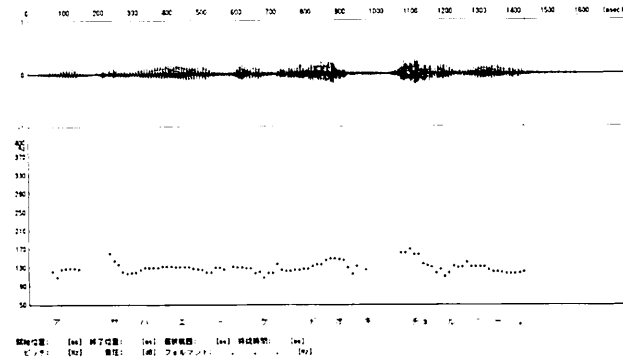


図6 03「オクルホーへー。」のピッチ曲線

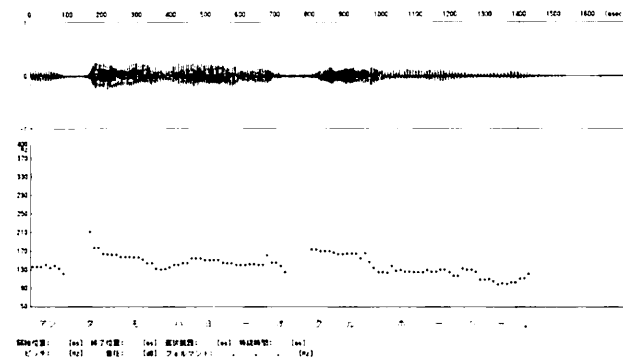


図5, 6は最後がわずかだが文末イントネーションの上昇が観察される。直前の「ョル」、「ホー」が頭高のアクセントであることと関係していると思われるが、上昇することによってある種の心情を示すことも考えられる。今回の調査だけでは判断できない。

図7 11「アーソーへー。」のピッチ曲線

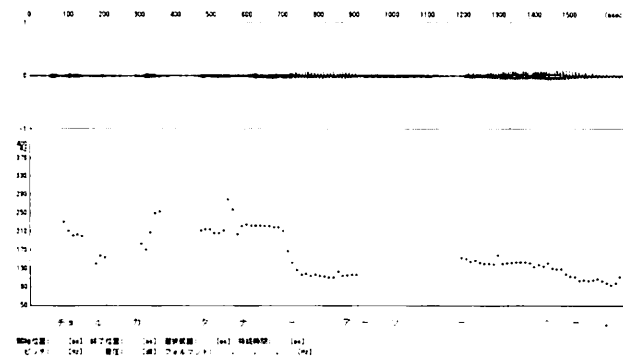


図8 23「へーソーへ。」のピッチ曲線

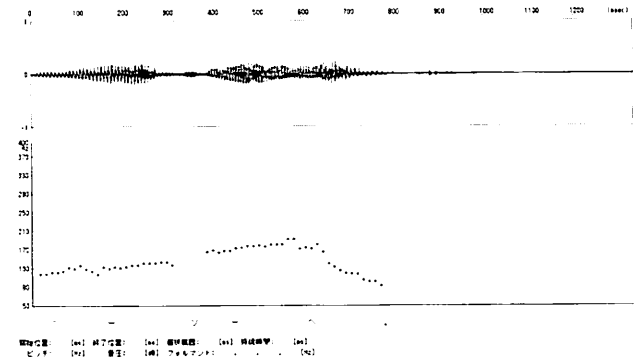


図7, 8は「そう(です)か。」にあたる、納得の意味の「ソーへ(ー)」である。どちらも文末にかけて下降している。共通語の「か」が疑問と納得をイントネーションの違いだけで表し分けるのとは違い、この「へ(ー)」はイントネーションの違いは特になさそうである。

15, 19, 20は、応答やあいづちの「はい」が母音融合して「へー」になっていると考えられる。文末詞の「へ(ー)」とは語源を別にするものであり、区別を明確にしなければならない。

### ③ 文末詞の「へ(ー)」の周辺 (語源)

共通語に「知っていたかい?」「もう、いいかい?」などの、疑問の文末詞「かい」がある。

仮説の域を出ないが、「かい」あるいは「かえ」という疑問の文末詞が変化(母音融合)し、ケ(ー)になり、さらにへ(ー)になった可能性は高い。千葉県には、「かかし(案山子)」がカハシ、「まけた(負けた)」がマヘタのように、k音からh音に変化する例が報告されている<sup>6</sup>。k音が子音脱落する過渡的な段階で同じ喉音のh音の時期があるとするものである。『日本方言大辞典』の「え」の項に「文末につけて用いる。①意味を強める。②疑問を表す。」とあり、②の疑問を表す地域は、青森県から大分県まで広がっている。大分の例文は「ほんとーえ」(上巻313p.)である。大分県方言の疑問の文末詞には1-3で紹介した通り、カヤ、カエ、カイ、ケーがある。これらの

<sup>6</sup> 平山輝男(1974)『方言体系変化の通時論的研究』明治書院

語形は「かえ」あるいは「かや」から音声変化した形である可能性が高く、同じ語源であったものが変化した形で各地に分布していると考えられる。そして、「へ(一)」も変化形の1つであることが、音声学や他所の方言の例からも無理なく説明できる。

## 4 世代差

第1次調査の記録によると、「へ(一)」は高年層に比較的少なく、青年、中学生の順に出てくる回数が増えていたとある。それが、第2次調査では高年層にしか出てこない。(ただし、高年層は盛んに使っている。)

今回も、高年層にしか出てこなかった。下の世代の使用例がないということは、現在の高年層の代が盛んに使い、そして下の世代には伝わらなかったということではないだろうか。では、その代わりに何を使っているかということ、「カ」、「カエ」や肥筑方言的な「ト↑」や「ネ」や「ン」、さらに共通語的な語尾の上昇イントネーションによって問いかける文を作っている。世代差については、いずれ稿を改めて述べる予定である。

## 5 まとめと課題

これまで、大分県玖珠郡方言の疑問の文末詞「へ(一)」を取り上げ、談話調査の中で観察された例文を書き出し、文末イントネーションをピッチ曲線で表した。その結果、次のようなことがわかった。

- ・へ(一)は、共通語の「か」や「の」と近い意味を持つが、疑問(問いかける)文の場合、かならずしも文末イントネーションの上昇を必要としない。
- ・直前の(述語の)アクセントによって、イントネーションが影響を受けている可能性がある。
- ・語源については、県内他所で使われるカヤ、

カエ、カイ、ケーなどに関係があると考えられる。

- ・下の世代では使われていない。へ(一)は、衰退の傾向にある。

今後の課題としては、まず、玖珠郡の動詞のアクセント体系を調べ、文末詞へ(一)との音調的な結び付きの規則性を明らかにすることである。先行研究によれば、前接の語の最終拍に対する接続の仕方と、文末詞の拍内音調の組み合わせによって記述する方法が良いようである。今回、観察できた数例からは、接続の仕方は低接(前接の語の最終拍が高くて、低いピッチで接続する)、拍内音調は平垣(変化しない)と予測されるが、例外も見られるので断定できない。

さらに大きな課題としては、各地の方言における疑問のイントネーションに差があることがわかっている<sup>7</sup>、その差が何を意味するのかを明らかにしたい。3で述べたへ(一)の語源も大きな課題であるが、バラエティに富んだ文末詞の由来の解明にも取り組んでみたい。

### 【付記】

この研究は、科学研究費補助金(基盤研究(C))「言語生活50年の変容—大分県方言談話資料を比較して—」(課題番号21520473、研究代表者:杉村孝夫 平成21~23年度)の研究の一部を使用しています。

この調査に関して、多くの方に御協力をいただきました。お話しくださった方々、また調査のお世話をしてくださった方々に、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

<sup>7</sup> 不部暢子(2010)「イントネーションの地域差—質問文のイントネーション—」『方言の発見—知られざる地域差を知る』ひつじ書房所収